



この一冊

Vol. 131



当会会員 高橋 謙治 (49期) ●Kenji Takahashi

著者の前作「サピエンス全史」は人類がどのように進化してきたのかを解きほぐした名著でしたが、本書は人類の近未来を大胆に予測したものです。

本書は冒頭から衝撃の連続です。幸福とは、古代ローマの偉人やブッダも研究したテーマですが、現代科学では、脳内の化学物質の分泌にすぎず、進化の過程で得たものです。人間の思考・情動は全て脳内の化学的・電気的活動なのです。言われてみれば当然ですが、これが伏線となってラストにつながっていきます。

著者は、引き続き、人類の脳には爬虫類の名残がある、豚の飼育は母豚に絶望を感じさせている、生き物はアルゴリズムである、など次々に衝撃的（ただし言われてみれば当然）な事実を披露します。

そして狩猟時代と農業時代の宗教の違い、人間と動物、人間と機械の異同、科学と宗教の密接な関係などが次々と展開されていきます。そこから、資本主義以前は均衡を前提としていたのに、資本主義は成長を最重要視する新手の宗教であることが導かれます。そして資本主義は人間至上主義という宗教を前提とし

『ホモ・デウス テクノロジーとサイエンスの未来』(上・下)



ユ瓦尔・ノア・ハリ 著
柴田 裕之 訳
河出書房新社
定価 2,052円(本体1,900円)

ており、その一分類として自由主義、共産主義及びファシズムがあることも導かれます。これらはいずれも神を否定し、人間至上という価値観で共通しているのです。

自由主義では、個人の自由意思を尊重します。しかし、最新の科学によって、個人の自由意思は実は存在しないということが論証されます。左右の脳は実は別々のことを考えていて、左半球が辻褄を合わせているだけのようです。

2016年に著された本書は、その後に明らかとなった、フェイスブックのデータの不正利用やフェイクニュースによる米大統領選挙への介入を予

言しているかのようなようです。フェイスブックのアルゴリズムは、「いいね」を300回した人の意見や欲望について、その人の配偶者より正確に予測できるそうです。一部の分野では本人よりビッグデータの方がその人のことを知っているとのことです。確かに、私のグーグルの全ての検索履歴があれば、グーグルは私の趣味嗜好や興味の対象について私以上に確実に知ることができるでしょう。

現代のテクノロジーを利用すれば人々を誘導することは容易であり、そのために個人の自由意思を前提とする自由主義や民主主義は、その基盤を失いかけているのです。

人間はアルゴリズムであってその点ではコンピューターと変わらない、意識の有無は異なるが、意識がないことはコンピューターに判断を委ねない理由にはならないことが論証されていきます。地球誕生以来、人類を上回る認識能力と記憶能力を持つ存在はいませんでした。これからはコンピューターが人類を上回り、巫女から（ある局面では）主人になるでしょう。多くの点で認識が改まる名著だと思います。 ■